

人間学的カウンセリング理論の考察 ——子ども人間形成をめぐる現代的状況に関わって——

川瀬 八洲夫*, 中村 薫**

(平成11年9月29日受理)

A Humanistic Psychology Study : Counseling Theory ; Concerning Humanistic Child Development in the Present Atmosphere

Yasuo KAWASE and Kaoru NAKAMURA

(Received on September 29, 1999)

はじめに

現代の日本は、歴史的に見て相対的に安全で豊かな社会である。しかし、子ども達は、いじめ、不登校、異常な攻撃性、過度のストレス、非行、自殺、心身症、アパシー、引きこもり等深刻な現代的問題の状況下にある。こうした状況の背景には、健康な人間的発達に欠かせない個性、創造性、生命への畏敬の念、また、自然・文化・社会的な環境に対応する望ましい価値意識、適切な情操が育てられていないことがある。その結果として、子ども達の無気力・無関心・残虐性・攻撃性・現実感の欠如などの非人間的な性向が肥大化してきていると考えられる。このような現代社会に生きる子ども達には、これまでの人間学的教育学の主張にも見られてきた¹⁾人間本性…意志・感情・愛・希望等の人間の根元的感情…の回復・強化の思想、及びその思想に基づいた人間形成の視点が欠如している。現代の子ども達に対しては適切な人間形成への援助としてのカウンセリングが必要であり、重要になっていると考えられる。

人間学的カウンセリング理論における中心的価値の基本には次のような諸点が指摘されている²⁾。

- (1) 人間の尊厳を信じ、人間的潜在力の発達に努力すること
- (2) 人間の“生”はそのプロセスとして理解され、変化は避けられないものとして理解すること

- (3) 直感的なものを大切にすること
 - (4) 生態学的統合にコミットメントすること
 - (5) 人間の世界になんらかの影響を及ぼしている重大な問題を認識し、希望と建設的变化に対する責任を引き受けること
- などである。

歴史的に、いろいろな分野から人間の固有の価値や尊厳が主張され続けてきたが、そういった主張や理論は、人間をただ単に経済的、政治的目的を達成するための手段としてしか視ないイデオロギーや信念・実践に対して痛烈な批判をし続けてきたのである。人間学的カウンセリングの思想は、いろいろな分野・領域において歴史的に展開されてきた非人間的イデオロギー、文化・社会などに対するプロテストであり、また現代の行動科学や社会科学の描く人間像にしばしばほめかされてきた人間精神軽視への批判である。これまでにいろいろ累積されてきた人間精神の軽視が、結局は現代の子ども・人間が抱える深刻な問題の根本にあると考えられる。今このような状況にあって、人間学的カウンセリングの理論から現代的問題の解決に対する多くの重要な示唆が得られるし、得るべきであると考えられる。

1. 人間学的カウンセリング理論の特質

人間学とは、もともと哲学の領域で多く用いられるようになったことばであるが、人間に関する個別科学の領域でも多様に用いられている。哲学的人間学が提唱されるに至ったプロセスを考えると、人間研究が個別的な科学領域の発展によって、対象である人間が結果的に断片

* 教職教養科 教育史研究室

** 志木市立教育サービスセンター(教育相談員)

化され、それゆえに、科学的研究が進展するほどかえって人間そのものの本質が見失われてしまうという逆説的な事態が進行するに至った事情がある。こうしたことに對して、人間を一つの統一的全体として捉えようとする理論・思想が現れはじめた。人間を統一的に視ようとする動機は、当然人間についての諸現象の根底にある人間の本質的なものへの問い、さらには世界における人間の独自の地位への探究を呼び起こすことからくる。このように、人間であることの本質、他のいかなる存在とも異なる人間に、人間独自の特質を自覚させようとする人間の自己探求の営みとして、人間学の概念は成立してきた³⁾。心理学においても、二十世紀前半における理論発展の過程で、人間を断片化し、モザイク化してとらえる傾向が著しかった。行動主義に代表される、自らを自然科学と規定する立場の心理学にあっては、人間理解を数量化においてすすめる方法上の基準がつくられ、それによって切り取られる限りでの人間の側面を心理学の対象としていたきらいがあった。その結果、心理学は、ややもすると、動物とも共通する有機体としての人間に関わる断片的知識の集積になってしまったりして、心理学そのものが人間の意識を失ってしまいかねない状況を出現させてきた⁴⁾。このようないわば「学」としての心理学の危機的状況のもとで、心理学に人間的意義を回復しようとする努力として、人間学的心理学は、臨床心理学、教育心理学、人格心理学等の領域を中心に、新たな発展を見せてきたのである。人間学的心理学 (humanistic psychology) とは、人間学の観点に立ってすすめられる経験科学としての心理学を指しているといえよう。

現在、人間学的と言われている心理学の間にも、相互にかなり著しい相異がある。共通する基本的特徴を分析してみると、人間学的心理学は、人間の本質的リアリティーの全体的把握を目指していることを基本に据えていることが指摘される。ここからつぎのような特徴を指摘しうるのである⁵⁾。

- (1) 人間を独自の個性を持った統一的存在としてとらえていること
- (2) 客観的に観察される行動について、そのメカニズムを解明していくよりも、むしろ行動が行為の主体たる個人にとって持つ意味を理解しようとする
- (3) 人間とその状況との関わりを重視し、文化・社会・歴史的条件に関心を向けること
- (4) 状況との関わりにおいて個人をとらえようとする

ところから、パーソナリティーということばよりは、世界内存在、現存在、実存といった用語が用いられること

- (5) 自由、責任、愛、自己実現といった人間に特有の現象が主題として取り上げられていること
- などである。

広義の心理学領域で人間学的傾向にあると見られる理論の流れは数多くあるが、ヨーロッパでの主要な代表者としては、現存在分析 (Daseinsanalyse) の創設者ピスワングァー (Binswanger, L.)、実存分析 (Existenzanalyse) を提唱したフランクル (Frankl, V.) など精神医学から出た人間学研究が挙げられよう。その他、比較心理学者ボイテンディーク (Buytendijk, F. J. J.)、人格心理学のレルシュ (Lersch, P.) らが著名である。アメリカでは、1950年代の後半から、人間学的心理学として総称される一群の心理学者達の運動が台頭し、その推進者であったマズロー (Maslow, A. H.)、ロジャース (Rogers, C.)、メイ (May, R.) らが挙げられる。彼らは行動主義、精神分析主義に対して「第三勢力 (the third force)」と呼ばれている。臨床心理学の領域では早くからロジャースらの影響が強く見られ、近年では教育学における人間学的傾向とも相まって、教育心理学の研究者の間にも、人間学的心理学への関心は高まりを見せている。

マズローの人間学的心理学は、理論的にはヨーロッパ実存主義や現象学に類似しているが、アメリカ独自の現象である。マズローの人間学的心理学の基調は、人間性について、成長仮説 (growth hypothesis) から理解するということにある。成長仮説についてマズローは次のように論じている⁶⁾。人間の本性の「本能のような」(instinctoid) 内面の核心には、現実に向かう圧力を持った可能性が含まれている。そのため、健康な人間は、欲求の階層 (hierarchy of needs) を下から上に昇りながら満たしていくことによって、自分の可能性と能力を十分に実現し、発展させていくことができるのである。この人間は生成の過程にある存在 (a being in the process of becoming) であるという見解は、マズローの行動主義や精神分析への批判の基本となっており、また、それは、倫理、教育、研究方法論、カウンセリングの実践等についての観点にも共通するものである。

マズローが、行動主義の統制と予測の概念を批判するのは、動機づけについての欲求階層論に基づくものであ

た。この理論は、表現的行動と対処的行動を区別するものであった。彼は、行動主義者がほとんど対処的行動の研究のみに着目していることを批判し、対処的行動は、パーソナリティの中で最も重要性の低い部分なのだ、と論じている⁷⁾。また、マスローは、対処的行動から人間性についての一般的な結論を推定することについて警告をしている。行動主義者達は、人間の動物的な局面だけを見ているが、それはまさに対処的行動だけを見ているからなのであると。

著書『可能性の心理学』(Psychology of Science)においてマスローは、行動を予測する力という点に関して、行動主義型の統制と、人間科学の指定する内面的自己理解とを比較している。彼はその中で、人間は外部的な、科学的な統制に対して非難と抵抗を示すけれども、自分自身の行動を自分で統制できるように自己理解を深化することは受け入れるものだ、と論じた⁸⁾。それゆえに、人間主義型の自己理解の方が、はるかに大きな予測力を持つものであると。

人間の動機というものは、目的的なものであり、選択に向かうものである。それは受け身の反応をするというよりももっと前進的なものであり、「予測された目標への反応」(anticipatory goal reaction)に制約されているというよりも、むしろ自己動機をもつ (self-motivated) ものである⁹⁾。人間は、特定の主観的な価値観を持っているのであり、それがその人の生き方に指標と方向を与えるのである。このような内面の態度や動機を理解することが、人間の行動や人間性を理解するための絶対的な前提条件なのである。

人間学的心理学者達は、自分たちの学派的観点を、心理学における第三勢力であると主張した。第一勢力は行動主義であり、第二勢力は精神分析主義を指している。マスローは、自分の見解を述べるときには、フロイト的な古典精神分析と対照を行っている。彼は、人間学的な心理学は、行動主義に対する抗議あるいは反抗であるばかりでなく、精神分析の形式主義、決定論、独断論に対する抗議でもあると論じているが¹⁰⁾、同時に、人間学的心理学はフロイトの所見に取って代わるものではなく、それを補完するものだとも論じている。マスローは、フロイトの諸説における事実と理論とを区別し、フロイトのあげた事実と臨床経験は尊重しつつも、その形而上学は否定したのである。

人間学的心理学の創設は、ヨーロッパ実存主義心理学

及び現象学の思想と重要な関わりを持っている。これらの思想の伝統が、人間学的心理学の形成と発展に大きな刺激を与えていることを、人間学的心理学の創設者達は一致して認めている¹¹⁾。しかし、人間学的心理学者達が、1950年代の末に実存主義哲学を発見した時、彼らは既に自分たちの心理学理論の核心を作り上げていたので、人間学的心理学がヨーロッパ実存主義を単に輸入したものであるというのは必ずしも適切ではない。

マスローは、1950年代の末頃以降から実存主義についての実質的な考察をしている。彼は、実存主義はアメリカの心理学を豊かにするものだが、同時に、多くの実存主義者の洞察は、既に人間学的心理学の中に存在する傾向を確認するだけのものにすぎないとも考えていた。実存主義者達が、アイデンティティーという考え方や主観的・経験的知識に関心を示していることについては、マスローも同じ関心を持っている。また、実存主義者達が、人間の本性のユニークな特質を探究し、実存的なジレンマや、人間生活の神秘的な局面、矛盾、悲劇的な局面、人間性の希望と限界等について論じていることに共感を示しているのである¹²⁾。マスローは、実存主義者達が、実際の経験とは何の関係も持たない抽象的な哲学の大系を攻撃していることを評価している。またあらゆる妥当性の源泉として、自己の内面以外に頼るべきものは何もない、という点に関してマスローは実存主義者達と意見を一致させている。この意味で実存哲学は、心理学が絶対的に必要としている、根底的な経験的・現象的な基盤を提供するものである、とマスローは考えている¹³⁾。彼はしばしば自己という現象学的世界と、科学者の物理的世界とを対置させ、実証主義的・原子論的型式による外部からの証明は、経験する自己の主観的・現象学的世界よりも現実的なものではない、と論じている。現象学的研究は、自己という内面の観点からどのように感じられるかということに焦点を当てるので、その方が人間の真実にもっと接近することができるということである。

人間学的心理学の成立には、行動主義と精神分析に対する批判、およびネオ・フロイディアンズおよび実存哲学からの影響が深く関わっているが、その他からの影響も受けている。オルポート (Allport, F. H)、ロジャーズ、メイなど、人間学的心理学の設立の中心者達は、その理論を展開する際に、ゴールドシュタイン (Goldstein, K)、パーソナリティ理論家達、ゲシュタルト心理学、東洋思想等からも影響を受けている。マ

スローもその例外ではない。マズローは、その自己実現についての研究によって、心理学界でよく知られるようになったが、「自己実現」という用語は、もともとゴールドシュタインの脳損傷を受けた服役軍人の研究の中で造られた言葉であった。ゴールドシュタインは、自己実現という概念を、負傷後の人間がその可能性を再組織する過程を説明するために用いたものであった。ゴールドシュタインによれば、損傷を受けた有機体は、自ら生き残ろうとするのであるが、その時自らを新しい統合体に作り変えていき、その損傷をも吸収してしまうのである。こうした意味で有機体は、自己を実現しようと努力するときに、積極的であり、生産的であり、創造的なのである。この現象をマズローは、「有機体的必然性」(organismic oughtness)という用語で表わしている¹⁴⁾。

マズローは、自己実現という概念をゴールドシュタインから得ているのであるが、彼はそれをもっと広い意味で用いたのである。マズローにとっては、自己実現は内面の可能性を実現化する傾向を意味し、それは自分なることのできる全てになろうとする意欲であり、自分の持っているもろもろの可能性や自分の中に内在している本性を十分に現実化しようとする欲求なのである。ゴールドシュタインと同じようにマズローもまた、基本的な欲求をひとつひとつ満たすことによって、人間は自己実現に向かっていくものである、と論じている。また、東洋思想も、マズローの心理学の形成について影響を与えている。マズローは老子・荘子の思想(タオイズム—Taoism)について関心を持ち、既に1949年という早い時期において、行動の表出的要因としての目的のある自発性(purposeful spontaneity)を説明するのに、タオイズムの考え方をを用いている。その後彼は、タオイズムは、自然や自己を理解する際の受容性や諦念(pasivity or resignation)と同じ意味なのでと述べ、人間性を探究するときに西欧の心理学者は、「タオイズム流」、「タオ流の無為」、「タオ流の傾聴」などから学ぶべきである、ということは何度も書いている。そのことによって彼が言おうとしていることは、「内面からの経験知」(experiential knowledge)を得るためには、科学者は、受容的であり、信賴的であり、緊張抜きで、物事が起こるのを妨害しないで、起こらせるままにさせておかなければならない、ということなのである。彼はまた、悟り、ニルヴァーナ=涅槃(Nirvana)、至高体験、

および自己実現などの概念の間の類似性についても研究をしている。

著書『可能性の心理学』(「Psychology of Science」)においてマズローは、タオイズムは、西欧科学を補うための学習のアプローチであると述べ、西欧科学の組織化、分類法、概念化は、現実の知覚を押し退けて、精神の作り上げた抽象的な領域を持ち込むことであり、この西欧科学の否定的な局面は、タオイズム的な非干渉の受容性と、経験の観照(contemplation of experience)を取り入れることによってバランスをとらなければならない、と論じている¹⁵⁾。

2. 子どもの人間形成への援助

— スクールカウンセリングをめぐる現代的状況 —

日本では1995年にスクールカウンセラー制度が導入されるまでは、子ども達の情緒や行動・生活に関する問題の指導は、「生徒指導」や「教育相談」と呼ばれ教師の役割とされてきた。多くの小・中学校では、生徒の非行、校則違反、教師に対する暴力や生徒間の対立・暴力、怠学等の反社会的行動を生徒指導として扱い、不安を背景に現れる不登校、学校あるいは家庭生活の悩み、仲間関係の問題などを教育相談として扱うことになっている。いずれもクラス担任が一時的な責務を持っているが、学校組織にはこれについて指導的な役割を果たす生徒指導部が設けられていることが多い。

文部省のスクールカウンセラー活用事業は、いじめや不登校等の子ども達の問題行動への対応として、1995年4月より開始された。この事業は、子ども達の臨床心理について高度に専門的な知識と経験を有するスクールカウンセラーを、小・中・高校に派遣し、その活用の方法、効果について調査研究するためのものである。その目指すところは、臨床心理学の専門家を学校に導入し、学校におけるカウンセリングの機能を強化しようとするものである。スクールカウンセラーの選考基準は、「財団法人日本臨床心理士認定協会の認定にかかる臨床心理士など、児童生徒の臨床心理に関して高度に専門的に知識・経験を有するもの」とされている。この事業の趣旨とスクールカウンセラーの職務内容について説明し、理解を得ることにより、この調査研究の円滑な実施をはかるとされている。スクールカウンセラーは、調査研究校に1名とし、年間35週、週に2回、1回あたり4時間勤務することを原則としている。しかし、臨床心理士の有資格者が

少ない県等では、実際に1校を2人で受け持ったり、週1回8時間の勤務とするなど勤務条件の運用は柔軟になされているが¹⁶⁾、現実的効用には課題が多く残されている。

これらの実施要項に記されているスクールカウンセラーの職務は次のような内容から成っている¹⁷⁾。

- (1) 児童生徒へのカウンセリング
- (2) カウンセリング等に関する教員及び、保護者に対する助言・援助
- (3) 児童生徒のカウンセリング等に関する情報収集・提供
- (4) その他の児童生徒のカウンセリング等に関し各学校において適当と思われるもの

(1)は子どもへの直接のカウンセリングであり、多くの臨床心理士にとっては日常各種の相談機関や医療機関での経験が生かせる活動である。(2)はコンサルテーション(他の専門家や非専門家が子どもの問題に関わるのを側面から援助すること)にあたり、子どもの臨床においては多くのカウンセラーが経験していることである。学校に配置されるという状況であるため、教師へのコンサルテーションに比重がかかると思われる。(3)は子どもの受けているカウンセリングや治療状況について情報を収集し、学校現場に提供することで地域機関との連携、学校現場での子どもの処遇に寄与することが期待されている。カウンセラーに求められているのはこのように個別面接による心理治療的役割から、コンサルテーション、コーディネーションと多岐に亘っている。カウンセラーの学校内での位置づけについては、校長の指揮監督下にあるとし、生徒指導に関する校内組織等に適切に位置づけるよう工夫し、効果的な活用を図るものと定められている。先に述べた生徒指導の機能を補強しようとする意図がここにうかがえる。

また、以上のような文部省によって導入されているスクールカウンセリングとは別に、独自のカウンセラーを導入している都道府県市町村の教育委員会も増えつつある。地方自治体のこのような動きの背景には大きく二つの理由がある。一つには、いくつかの地域の学校では、資格を有する臨床心理士を見つけないことができないということと、もう一つには、地方自治体の教育委員会が子ども達の人間的発達のための援助について独自の理念を持ち、それを実現させようとする意図である。資格を持った臨床心理士でなければならないという考えではなく、

若い心理学を学ぶ学生、元教員、各種のカウンセラーの経験者、あるいは地域の世話役などそれぞれの考えに沿った人が起用されている。この場合、子ども達と青年を助ける役割とその位置づけに基づき、スクールカウンセリングという用語そのものが必ずしも使われるとは限らない。このようなケースの例としては、埼玉県「さわやか相談員」や、市川市の「ライフカウンセラー」等があげられよう。このライフカウンセラーは中学校に配置され、子ども達が快適と感じることができる安全な環境を提供し、子ども達の生活に影響を及ぼす問題の相談にのっている。ライフカウンセラーは臨床心理学の専門教育を受けていることが条件とされている¹⁸⁾。

論者(中村)は、前述のさわやか相談員とともに活動をするボランティア相談員として約二年間埼玉県の公立中学校で相談活動を行って来た。このさわやか相談員及びボランティア相談員については以下のように規定され、それに基づいて運用されている¹⁹⁾。

(1) 相談員の校内組織における位置づけ

さわやか相談員・ボランティア相談員は教職員の相談活動を補完する存在である。従って、相談活動を安易に相談員任せにしないように教員は留意する必要がある。教員は日頃から相談員との信頼関係を確立し、相談活動の理解、情報交換に努め、それを指導に生かさなくてはならない。また、学校全体で相談員をバックアップする体制の確立が求められる。

(2) 相談員の活動

さわやか相談員は、県内の公立中学校に一名配置される。また、ボランティア相談員は、各校立中学校に原則として1名配置される。

(3) 勤務時間(例)

さわやか相談員(6時間勤務) 10:30~17:15
 ボランティア相談員(4~6時間勤務)
 10:30~14:30(16:30)

(4) 業務内容

さわやか相談員の業務はおおむね以下の通りである

- ア 児童生徒との相談・援助に関すること
- イ 学級担任・養護教諭等との連携及び助言・援助に関すること
- ウ 学校・家庭・地域との連携及び情報収集に関すること

(5) 相談活動(例)

- ア 相談者は、当該中学校の生徒、その保護者、当該中学校区の小学生、その保護者とする。
- イ いつでも気軽に相談できる雰囲気を作成する。ただし、下記のことについては十分に留意すること。
1. 本当に相談したい生徒が相談室に訪れにくい状況にならないようにする。
 2. 出入りすることはよいが、たまり場にならないようにする。
 3. 授業をさぼる口実のために利用されないことがないようにする。
 - 1) 相談内容は、さわやか相談員と相談者との人間関係を優先し、いじめ、登校拒否に限定せず、心配事や悩み事等に応じる。
 - 2) さわやか相談員と相談者との信頼関係を大切に、相談者のプライバシーの保護に努め、相談内は原則として秘密とする。ただし、内容によっては相談者の承諾のもと、担任、養護教諭、さわやか相談員担当者（教育相談主任等）、その他の組織と連携する。
 - 3) 家庭訪問は原則としてさわやか相談員は行わない。ボランティア相談員が担任との連携のもとに行うこともある。
 - 4) 可能な場合は電話相談を行う。

などである。

さわやか相談員は埼玉県独自の事業であり、平成8年度から段階的に導入されている。いじめ、不登校問題対策事業として、学校、家庭、地域において、子どもが安心して生活し、悩みや不安が生じたらすぐに相談できるような心の安らぎの場としての機会を設け、いじめや不登校の予防としても機能するような施策を展開するものである。各中学校に一つ相談室を設け、そこにさわやか相談員は月曜日から金曜日までの週5日間勤務し、相談活動を行う。ボランティア相談員はボランティアという立場上、出勤日数は人により異なっているが²⁰⁾、相互に連携を持ちながら相談活動に参加している。

3. 人間学的カウンセリングの現代的意味と課題

前節で述べたような近年急速にスクールカウンセラーが導入されるという動きがあった背景には、我が国での不登校やいじめを主とした子ども達の問題が近年著しく

増加しているという現実がある²¹⁾。不登校の発生要因については、学校・家庭・社会における身体的・心理的・情緒的・社会・文化的背景などがあげられる。それはその個人によって異なる多様なケースがあって、一概には定めがたい。個人的な事情や子どもの性格的なものなど様々な要素が絡み合っているため一言に具体的な不登校の原因を論じることはできないが、そういった個別の事情とは別の部分で、多くの子ども達に共通する現代社会特有の問題傾向があると考えられる。いじめや不登校が蔓延し、塾通いと受験の過当競争に脅かされる子ども達の生活においては、健全な人間形成に欠かせない個性、創造性、生命や人間への畏敬の念、また、自然・文化・社会的環境やそれを構成する高尚で美しいものに対する正当な関心(interest)が育てられていないこと等々がある。その結果人間形成に必要なものや、物事に対する感激、感動のない無気力、無関心というアパシー(apathy)的性格が早くから形成されてしまうのである。いずれにしても学校や家庭という発育・発達・人間形成の場に、非人間的・非人格化の要因が多くありすぎるために、人格形成に欠かせない人間的体験の欠如、人間関係の稀薄化が促進されてしまっているのである。子どもは自らの人間的発達のために、意識的にせよ無意識的にせよ、先にマスローの欲求階層論で見たように多様な多面的な心身の発達欲求を持っている。しかしこの発達欲求は子どもの精神的、身体的の発達に諸相に応じて、言語・態度・動作など様々なレベルのサインとして表される。それゆえ、カウンセラーのみならず社会自体がこれらに対する知識、各種の能力、構えを常時持っていないてはならないのである。そのために人間学的カウンセリング理論においては一個人の主観を越えたモデルとなる人間像が追求され、カウンセリングを越えた領域と連携した運動が強調されているのである²²⁾。

人間の生涯にわたる生は人間的であり、正気であり、そして健康と幸福のうちに円満に生を全うすることが望ましい。人間的であるためには、人間性として備わっていたり、つくられたりする正当な多様な能力を持つ必要がある。そのための知性や理性・道徳・技術そして身体的能力などがバランス良く望まれるのである。しかし、知性・理性・技術・身体的能力はよりよく生きるための生産的能力として望ましい方向に使われると同時に、反対に否定や破壊、退行方向にも使われる。人間は己の知識や技術、あらゆる能力を善と悪、正気と狂気の裏表の

両面に使うことのできる存在なのである。こうしたことの現実的現れは国家、民族、集団、個人等様々なレベルでの対立・抗争・破壊・差別等に見ることができる。このような社会におかれてその対立や抗争に様々なレベルで巻き込まれている子ども達には正しい指導・援助が不可欠である。予防的観点だけでは不十分で、積極的な治療や危機介入が必要な子ども達が増加している現代においては、人間形成の援助のあり方は、人間学的カウンセリング理論が示すように、根本的なところから見直されなければならない。カウンセリング及び人間教育をいかに再構築するかという問いへの答えも、その根本的な見直しから得られなければならないだろう。

ランゲフェルド (Langeveld, M.J) は、子どもの成長について、単に自然的な性質のものでもなければ、また単に教育的なものでもなく両要素が分かちがたく浸透し合っているメカニズムであるとし、内面が伴わずに肉体だけが大人になったような人間を指して「自然なままの状態」と判断するのは間違いであるとしている²³⁾。このことは、マズローが、創造性の教育を提唱しつつも専門的な知識等を学ぶことの価値も認めていることと関連している。マズローによれば、知ることの経験的方法と実験的方法とは全く正反対のものでなく、その二つは相互に補完し合うものなのである。つまり、経験に基礎を持たない抽象的な知は危険なものであり、経験とは常に相互に作用し合わなければならないのである²⁴⁾。このような観点は、「自由」や「自発性」や「個性」等を理念として掲げているいる教育の現場が、実際には単なる「放任」や「無秩序」の状態に陥るといった過ちへの警告として受け止められよう。

またこの知に関する見解は、自己実現と欲求の階層理論の前提にもなっているものである。欲求の階層理論においてマズローは、自己実現よりもさらに上に自己超越の欲求があるとす。その欲求は全ての低次欲求と全く同じように人間性の一つの局面であり、それを否定されれば病気を生み出すことになるものであるとしている。この自己超越の欲求という概念は慎重に捉えられなければならない概念である。なぜならば、この概念は誤解をされやすい傾向があるからである。その誤解とは、その自己超越に至るための手段について安易な発想をすることであるが、かつて実際に、麻薬を用いた意識変容によって自己超越を求めるカウンター・カルチャーの過激派の人々が増加したことがあった。マズローとロジャー

スはそのことを批判している²⁵⁾。彼らがそれを批判するのは、そういった急速に自己超越を求めるという行為は理性を欠いており、知的な厳しさを持たず、都合のいいように歪曲して経験主義を解釈しているからである。つまり、欲求の階層とは、不自然な手段でそれぞれに段階を踏まずに一気に昇ることができるものではなく、経験との健全な相互作用によって獲得された知がともなって適切に昇ることができるものである。従って、自己実現者の特徴としてあげられる「必ずしも世論に迎合しているとは限らない」ということが、けっして倫理に反するような人間を意味してはいないことも明らかである。この自己実現者の特徴についても誤解を招きやすい部分があるので注意が必要だと思われるが、自己実現者とは必ずしも世間に適応しているとは限らないが、あくまでも彼らは、真・善・美等を選び全ての人々の見本となるような人間なのである。このことは言葉で表現されると一見矛盾しているようにも見え、大変捉えにくい概念であるが、そのように言葉等の手段によってマニュアル的に簡単に伝えることができないという性質こそが、人間学的なカウンセリングの本質をも表していると思われるのである。

人間学的カウンセリングには、精神分析や行動療法のようにあらかじめ定められた固定的な治療目的がないことが特徴であるが、価値も倫理も確実に存在するということは言うまでもない。ただ、精神分析や行動療法のようにマニュアル化しやすい性質の技法や方向性ではないために、そのカウンセリングを理解するためには曖昧さや複雑さが伴うのである。そのため、ランゲフェルドは、教育上の注意点として「子どもの人格は社会化されなくてはならないが、だからといってそれはあらかじめ特定された基準に従い、画一化された型の成人へと社会的に条件づけられるべきだという意味ではない」²⁶⁾と強調している。これは人間学カウンセリングにおける成長仮説を前提とした、人間の本性を信頼する人間観からの指摘である。

そして、そのような曖昧性を伴う人間学的カウンセリングであるために、クライアントの中で進行しているプロセスを、人間的に正しく感じ取る方法をいかにしてカウンセラーが獲得するべきか、また、いかにしてそのような人間学的なカウンセラーを養成すれば良いのかということが重要な課題となる。本来的な人間学的なカウンセラーを養成することは、それが人間学的であるために

困難である。そのことはロジャースの来談者中心療法の理論からもうかがうことができる。

人間学的カウンセリングの技法を体系化したロジャースの来談者中心療法について見てみよう。特徴の第一は、カウンセリングにおけるリレーションの重要性を他のカウンセリングの学派に先駆けて論じた点である。このリレーションの重要性は、カウンセリングの技法を越えるもの、あるいは技法に先立つもの、すなわちカウンセラーのパーソナリティがカウンセリングの条件であることを意味している。そしてこの点がロジャース流のカウンセラーを養成することを困難にしている点である。「自己一致」はカウンセラーの条件の一つでもあり、カウンセリングの目的でもあるとするロジャースのこの見解は、人間学的カウンセリングの基本であり、重要な視点である。

しかし、この人間学的カウンセリングの本質に沿っている療法にも問題点もある。まず、人間学的カウンセリングはあらゆる病理現象の原因が自己の不一致であると考えるところから、この療法では診断を必要としないが、そのことはクライアントの問題行動の具体的な各論に対応することを困難にするのではないかということである。人間学的カウンセリングの観点からは、診断は外的枠組み、すなわち先入観やカウンセラーの主観的見解を生じさせるので、真のクライアントの理解の妨げになると考えられる。しかし、このようなクライアントの自己治癒力に対して無条件の信頼を持つことが、例えば自閉症児のように支持的な対応が効果を発揮するといわれているようなクライアントの場合には問題となると思われる。また、人間学的カウンセリングは、クライアントの内的心理状態の変容に重点を置く傾向があるため、外的環境への働きかけが軽視され、その結果としてカウンセリングが非能率的になることも考えられる²⁷⁾。

結 び に

人間学的カウンセリングの現代的意味と役割について考察するとき、いくつかの課題が浮かび上がってくる。子どものカウンセリングの現状については、人間学的カウンセリング理論の観点からの改善点があげられる。まず、現在の子どもへのカウンセリングのあり方は、カウンセラー個人の資質の問題と、カウンセリングに関わる行政の問題の二つの点から見直される必要性があると思われる。トータルな人間存在である一人の子どもを何か

しらの側面からのみ切り取るというようなスタンスでは、その子どもの自己実現を促していく可能性を見落としてしまうことになる。しかし、現在の学校を中心としたカウンセリングの現場では時間的にも空間的にも多くの制約があり、いわゆるブーバー (Buber, M) のいう「我—汝」の関係を形成できる状況が整えられておらず、むしろ「われとそれ」の機械的な関係に陥りがちになっている。そのような体制を見直すためには、学校という組織の中におかれているカウンセリング機関の場合、その管理体制と教育のあり方から必然的に影響を受けざるを得ないため、そのカウンセリング機関の枠を越えたカウンセリングの視点が必要とされる。すなわちそれは、人間学的カウンセリング理論が展開している教育運動、社会運動のつながるもの、マスローの論じた「共生的な社会」²⁸⁾の視点である。カウンセリングの問題を考えるとときにそのカウンセリング機関やカウンセラー—個人だけに焦点を当てるのではなく、教育や社会全体を視野に入れたより高次な人間中心のパラダイムを持たなければ、問題の根本的な解決にはならないであろう。真のカウンセリングは一般化した技法の理論によるだけで安易に学べるものではなく、技法を越えたもの、メタスキルの必要性があるのだらう。しかし、まだそれが見落とされていることが問題であろう。職業的な能力を初めとしてあらゆる能力を機能として機械的に見なすことは、人間学的カウンセリングの人間観とは正反対のものであるが、そのような人間観がカウンセリングや教育の現場では通用している現状があるとすれば、人間学的カウンセリングのパラダイムから多くの示唆が与えられてしかるべきであろう。そして、そのような人間学的な考察は数量的な検証に適した性質のものではないため、それを記述し研究していくことも今後の課題である。増加を続ける不登校やいじめや非行、そういった問題を抱える子ども達の姿は、自発的に成長の欲求が妨げられていることのあらわれである。学歴社会の競争のために塾で機械的に知識を詰め込まされて不健康になっている子ども達等は、欲求の階層の一点に病的にとどまってしまっている。本来、自ら成長する力を持った子ども達が、順調に欲求の階層を昇っていけるようにカウンセラーは援助しなければならぬ。そしてそのためにはカウンセラー自身が技法以前のものを自ら育むことも必要とされる。人間学的カウンセリングは、価値の方向付けにおいては、人間と人間が本質的に持つ自己決定の能力に対して、希望的で

建設的な見解を持っている。また、人間行動の志向性や倫理的価値が強力な心理学的な力であるという確信に導かれてもいる。この確信からこそ、選択や創造性、身体と心と魂の相互作用、より多くの気づき、自由で責任が持て、人生を肯定し、信頼されるに値するような能力といった、人間に顕著な特性を高めようという努力が生じるのである。

人間学的カウンセリング理論は、心が社会や無意識のうちに存在する諸力に強く影響されていること、また、これらの影響要因の中には否定的で破壊的なものもあることを認めている。しかし、それにもかかわらず、人間の独立した尊厳や価値観、個人の能力や自尊感情を適切に発達させていく意識の能力を強調する。この価値の方向付けからこそ、人間個人及び個人間のスキルを促進したり、生活の質を高めたりする広義のカウンセリングが発展してきたのである。

人間の内的成長には多くの困難がある。そのため、しばしば、人間学的カウンセラーは、人が自分自身の変化に直面したときに、自分自身で責任がとれるように、勇気を出して学ぶことが重要であるということを強調する。人間の個人的成長を励ますことの難しさは、人間が成長してゆけるような適切な制度と組織の環境を築いていくことの難しさとも対応している。環境を整えることは、健康なパーソナリティーを発展させる上で重要であるので、社会政策の形成において、人間としての欲求は優先的に配慮されなければならないだろう。このことは、各種の抗争や核戦争、人口過剰、伝統的社会構造の崩壊といった社会的レベルの危機と、経済的な豊かさに反比例する形で深刻化する子ども達の人間性の喪失やストレスの増加という個人的な危機に迫られる現代において、ますます重要になっていくことであろう。多くの人間学的心理学者は、社会変革、つまり、古い制度を修正して、人間の発達と組織の効率の両方を維持することができる新しい制度を考案するという挑戦が重要であることを主張してきている²⁹⁾。多様な危機に脅かされながら急速に変化し続けている現代社会において、とりわけ子どもの望ましい人間形成について考えるならば、そのような主張に今改めて注目することが重要であると考えられよう。

注

- 1) M. J. Langeveld「続 教育と人間の省察」岡田渥美・和田修二 監訳 玉川大学出版部
O.F.Bollnow : Anthropologische padagogik (浜田正秀訳「人間学的に見た教育学」玉川大学出版部)
- 2) 人間性心理学会「人間性心理学研究」第15巻1号 p.124-130
- 3) R. J. Decovalho : The growth hypothesis in psychology.chap1
- 4) Ibid
- 5) Ibid
- 6) I, A.H.Maslow:Motivation and Personality (邦訳「人間性の心理学」産業能率大学出版部) p.116
- 7) A.H.Maslow :Motivation and Personality ; (邦訳「人間性の心理学」産業能率大学出版部)
- 8) A. H. Maslow : Psychology of Science ; (邦訳「可能性の心理学」川島書店)
- 9) 同7) p.55, pp.63-79, 80-100, 同8) p.55
- 10) 同7) pp. xiii, 66-67, 103
- 11) A.H.Maslow : Toward a Psychology of Being ; (邦訳「完全なる人間」誠信書房)
- 12) 同11) p.59, p.174
- 13) A. H. Maslow : Religions, Values and Peak-Experience ; (邦訳「創造の人間」誠信書房) p.26, 41, 同11) pp.52-60
- 14) 同11) pp. ii, v, ix, 118,
- 15) 同7) pp.182, 291, 同11) pp.55, 78, 119, 136, 184
- 16) D.Yagi : The school counseling ; (邦訳「スクールカウンセリング入門」勁草書房) pp.157-161
- 17) Ibid
- 18) Ibid
- 19) 埼玉県教育委員会「平成10年度心のオアシスづくり推進会議報告書 さわやか相談員・ボランティア相談員の効果的な活用について」「心のオアシスづくりいじめ防止プログラムQ&A」
- 20) Ibid
- 21) Ibid
- 22) A. H. Maslow : Eupsychian Management ;

- (邦訳「自己実現の経営」産業能率大学出版部)
- 23) M. J. Langeveld「教育と人間の省察」岡田渥美・和田修二 監訳 玉川大学出版部 p. 96-100
- 24) A. H. Maslow: Father Reaches of Human Nature; (邦訳「人間性の最高価値」誠信書房) pp. 183-212, 80-195, p. 377, 同7) pp. 6-12
- 25) C. R. Rogers: Some Questions and Challenges Facing a Humanistic Psychology; Journal of Humanistic Psychology 5. pp. 1-5
- 26) 同23)
- 27) 國分康孝「カウンセリングの理論」誠信書房 pp. 96-101
- 28) 同22)
- 29) I bid
14. A. Mindell: Working with the Dreaming Body; (高岡よし子, 伊藤雄二郎訳「ドリームボディ・ワーク」春秋社 1985)
15. A. Mindell: Rever' way; (高岡よし子, 伊藤雄二郎訳「プロセス指向心理学」春秋社 1985)
16. 総務庁 青少年対策本部編「青少年白書」1998
- 他

参考文献

1. A. H. Maslow: Eupsychianmanagement; (原幸広訳「自己実現の経営」産業能率大学出版部 1967)
2. C. Rogers: Client-centered Therapty; (邦訳「ロジャーズ全集・第3巻」岩崎学術出版社 1996)
3. C. Rogers: On Becoming a Person; (邦訳「ロジャーズ全集・第4, 5, 6, 8, 12巻」に分訳. 岩崎学術出版社 1996)
4. C. Rogers「人間尊重の心理学」畠瀬直子監訳 創元社 1997
5. 日本の子ども家庭総合研究所「日本の子ども資料年鑑第6巻」KTC中央出版
6. 川瀬八洲夫「教育方法論」酒井書店 1994
7. 川瀬八洲夫「教育と社会」垣内出版株式会社 1991
8. 川瀬八洲夫「人間—その生と形成」相川書房 1993
9. 河合隼雄「カウンセリングの実際問題」誠信書房 1998
10. ロロ・メイ「新・カウンセリングの技術」黒川昭登訳 岩崎学術出版社 1997
11. 原田政文, 府川満晴, 林秀子「スクールカウンセリング再考」朱鷺書房 1997
12. R. May: Men's Search For Himself; (小野泰博・小野和哉訳「失われし自己を求めて」誠信書房 1997)
13. V. E. Frankle: Aertzliche Seelsorge; (霜山徳爾訳「死と愛」みすず書房 1996)